

一谷嫩軍記 熊谷陣屋の段

一ノ谷の源平合戦で、岡部六弥太に討たれた平忠度の話をもとに並木宗輔らが劇化した時代物で、初演は宝暦元年（1751）。播州歌舞伎では、先代獅山の熊谷が当たり芸で、大いに人気を博しました。

時は寿永三年(1184)二月半ば、舞台は熊谷直実の陣屋。妻の相模が遅い夫の帰りを軍次と待っているところから始まります。相模は息子・小次郎の身を案じて、はるばるやって来たものの、夫に叱られないかと、不安な様子。

奥では、頼朝の密使・梶原平次景高が、御影の石屋（弥陀六）を引き連れてきて、なにやら詮議をしようと待ちかまえています。そこへ熊谷が帰ってきて、相模に小次郎のことを話すうちに、敦盛を討ちとったことを告げます。それを聞いた藤の局が、悲憤のあまり飛び出でてきて「わが子の仇」と、熊谷に斬りかかります。けれども、敦盛の首級（しるし）として首実検に供されたのは、なんと小次郎の首でした。驚愕する相模と藤の方を「一枝を伐(き)らば一指を剪(き)るべし」と記された制札で押さえる熊谷に、敦盛を助けよとの内意を熊谷が見事に察知し遂行したを知った義経は「よくも討った。敦盛の首に相違ない。この首にゆかりの人もありつらん。見せて名残を惜しませよ」と声をかけます。ここで浄瑠璃くあいとばかりに女房は、あへなき首を手に取り上げ見るも、涙にふさがりて、かわる我が子の死顔に、胸はせき上げ身もふるはれ、持ったる首のゆるぐのを、うなづく様に思はれて・・・>の名調子が入り、悲しみに狂う相模に誰しも思わずもらい泣きをさせていただきます。

このとき、奥で様子を窺っていた梶原景高が「聞いた、聞いた。義経、熊谷心を合せ、敦盛を助けし段々、いざこのことを鎌倉公に注進せん」と言って登場しますが、弥陀六に殺されてしまいます。この謎めいた石屋の弥陀六、実は平弥平宗清に託された鎧びつに敦盛が入れられているのを見届けると、熊谷は義経に暇をもらい、名を蓮生と改め、相模を伴って西方弥陀の国へと旅立つのでした。一方、藤の方も弥陀六について行き、無情の風にさらされる中で幕となります。

合戦の様子を聞かせる熊谷の語り、二人の女性を押さえる「制札の見得」、迫真の「首実検」の場、出家して思わず口にする「十六年は一昔」の述懐など、数々の名場面を中央公民館播州歌舞伎クラブの若者が渾身の力を込めて演じています。